

「国語基礎」の指導を通して

森 洋子

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2006年11月8日受理)

Thoughts from Instructing Students in “Basic Japanese”

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,

Major in Primary Education,

Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

MORI Yoko

(Received November 8, 2006)

「国語基礎」は、これまで学習を受ける側にいた学習者が立場を変えて、学習させる側に立つて学ばせること、また教科学習指導に関して追究することを、学びの目的としている科目である。

本稿は、学習者のこれまでの受け身感覚の授業意識から、主体的に授業に立ち向かう意識の転換と高揚を図ること、国語科を教授するに当たって、教科のもつ環境把握や教科の特徴などを見極めようとする力を養っていく指導の在り方を考察するものである。

1 本科目の展望と自覚

教員養成課程の履修科目として、学習者は国語科を指導していく立場で本科目を展望することになる。

展望の第一に、国語科に対する児童生徒の特異な意識に着目しなくてはならない。文科省の指示によるある調査では学校での国語科の学習が好きではないという児童生徒が多くいること、しかしながら、彼らは学校の勉強の中で読む力、書く力、伝え合う力を身につけることはたいへん大切であるという意識をもっていること、この全国調査からの実態把握を無視しての国語科教授の追究はできないものとする。^(註1) (国語ぎらいの子どもの多さは、今に始まったことではなく、何年来

続いていることであるが。)

学習する子どもたちは国語科に必要感を感じつつも嫌いな教科であるということの展望は、調査結果を間接的に読み取るだけでなく、身をもって調べてみるに足ることと捉える課題である。

では、教員をめざす学習者自身の国語学習への意識はどうかと振り返らせてみるに、その44%約半数が「国語科の学習は好きではなかった」と答えている。こうした自分たちの姿も、国語科に向かっていく今、問題意識をもって把握しなくてはならないことである。

国語科の学習が、必然そのものなのに、児童生徒から大学生に至るまでが好きになれないことは、国語科がそういう教科であり、それが特徴の一つであるといえよう。そういう

教科であるとは、どういうことなのかを先ず意識して、潜んでいるもの見だし、その解決に向かう学習が必要であることに意識づいていけるようにする展望である。

そうしたことへの学習は本科目だけで終結できるものではなく、以後の履修科目に続くのであるから、国語科指導への今後の学びの課程がどのように仕組まれているのか本科目の位置を認識し、発展の方向を見通すことが展望することの本命である。

こうした展望が、学びの筋道を自己の内に把握する目を育て、学習意欲と学習内容の理解をより促すことになる。それはまた、指導者となっていくときの学ばせ方への着眼づくりに繋ぐものと考ええる。

科目の位置関係は、教員の側からは指導内容を焦点化する視点につながることもある。

問題意識をもって臨む主体的意欲的な学習姿勢の確立を図っていくことは、前述の国語科の学習に伏在している課題に目を見開いていく構えを養うものと考ええる。

「国語基礎」の科目は、指導者養成への土台となる教科の基礎科目として位置付けている。

2 学習内容を概観する

「国語基礎」は、国語科の指導方法を学ぶ以前にその基礎となる内容を修得することをねらいとする。つまり国語科の指導技術を習得することではなく、指導に当たっての基礎としての知識を習得することにある。

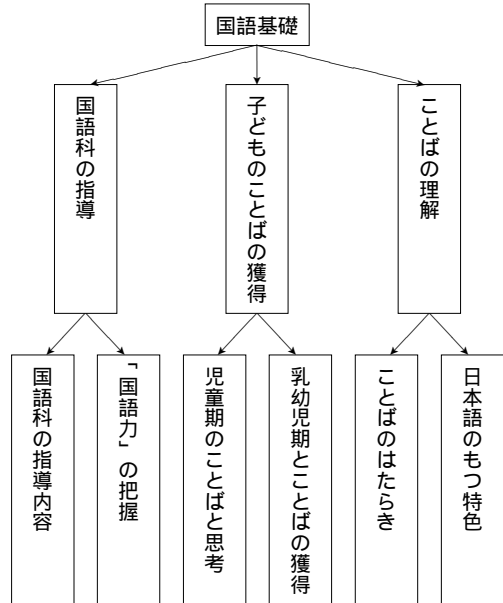
加えて、受講者の半数は幼稚園教諭をめざしての履修であることから、学習内容設定に当たってはそれを考慮に入れなくてはならないことになる。

こうした視点から学習内容を次のように考えた。

- I 指導する側に立って、国語・ことばについて理解を深める内容。
- II 指導する対象となる幼児・児童とことばの関わりを理解する内容。
- III 「国語科」で指導することに関して理解する内容。

上記 I・II・III の三つの場面を捉え、それぞれに関わる内容項目を以下のように設定した。

【構造的に捉えた学習内容】



三つの窓口から国語科の指導のための基礎としての学習内容を想定するとき、前掲の児童生徒の実態、それは国語科のもつ特徴を如実に示すものとして、設定の視座に入れなくてはならないことである。この6項目についてのそれぞれの内容を学習者は概観することによって、国語科とそれを指導していく自分とを対峙させて見据えることに、導くことができる。

- ・学習を分らせていくためには、全体と部分とを明確に分けて示すことによって、学習内容を整理して与えていくことが、理解を容易にする方法であることに気づかせる

ことができる

- ・挙げた項目を概観し、自己の既習の力と対比して、これからの学習課題を、自らに抱かせることができる。
 - ・学ぶ過程が明確であることが、学ぶ意欲の啓発に繋ぐことを意識することができる。
- 学ぶ意欲の啓発とは

上記の6項目の設定について、それぞれに関係する項目を2項目ずつに絞ったのは、履修時間15コマの中での学習で、限られた時間を考慮したからである。1項目に2時限ずつを当てると12コマの時間を要することになる。勿論、2コマの中で完結できないものもある。それらの内容については、学習者の主体的学習への誘いとなるようにして、課題にすることができる。

「国語科指導のよりよい担い手になる」とする明確な目的のための自主学習課題を提示しながら学習を進行させていく過程こそ、学習者のひとり立ちを促すための道程であると考えられる。学習者自身が自分の足らざる部分について自身で高めていく力を養うようにしていく方法を身につけさせることが教育の本義であり、これはその実践的な学習過程である。

3 授業実践事例

【ことばのはたらき】の項の授業から
授業のねらい

国語科はことばの習得をする学習であるが、ことばというものは、人間の生活や成長に深く関わり、ことばの習得により人間としての高まりを遂げていくものであることを理解することができる。

学習過程

ことばは人間の生活と、どのように繋がっているか。

- 1 ことばは形をもたないが生活上の道具であり、人間生活を成り立たせ、人間関係を作っていくために食と同等に必然の道具である。
- 2 すべての学習はことばを通して行われるから、人間が学び成長していく上でことばは欠かせないものである。

上記の二点については、上述のようなことばを使って、ことばと人間の生活との関係を述べることができ、大半の学習者が伝達と認識の道具として言語を意識していた。

- 3 人から掛けられることばを聞いて励みや励ましを感じたり、読書によって気持ちを高めたりすることができ、生活の潤いをつくり出すものとしてはたらきがある。

ことばが上記のような、人間の情感を潤し高めるものとして精神面と関わり、文化と結びつくはたらきをもつことは、意識になかった。提示して初めて気が付く状況にあった。

- ・ここでも三点にまとめ、分けて捉えていく意識を養うようにした。ことばが、人間の日常生活にも、学習して学び成長するにも、より豊かに生きるためにも深く結びついていることを、言葉にまとめることができた。

言葉にまとめることができたから、「ことばのはたらき」がわかって、自分のものとして自分の中に位置付けて役立てていくことができるかと言えば、それにはかなり無理がある。事柄をことばを介して理解していくとき、(社会の中の大半のことがあてはまることであるが)その事柄を既知のことばで説明し言い換えることで、「分かった」とする学習の進め方が多くあるが、それは不十分である。

ここが、よくある国語科の学習の盲点と言えるところではないかと常々考えている。学習者には「意識する」と「理解する」のことばの違いから、「分かる」ということはどうということかを掴ませるように進めることである。

「ことばのはたらき」について、分かるということの認識の状況を、「意識できた場合」と「理解できた場合」との分かり方の違いを示し、国語科的的確な指導のあり方を求めていかななくてはならないとする意識を高揚させることである。

ことばのはたらきを理解するとは
ことばのはたらきの一つめに

1 ことばは形をもたないが生活上の道具であり、人間生活を成り立たせ、人間関係を作っていくために食と同等に生きていくのに必然の道具である。

このことばから、その内容を分かっていくときには、日常の言語生活を想定して、

- ・生活上の会話のやりとりの場面
- ・互いの都合など伝達しあう場面
- ・新聞を読むテレビの声を聞くなどの場面

を想定して、話したり、聞いたり、読んだりしている様相を物理的に捉えているのが一般的であろう。

ことばを自分を介して状況と共にとらえる場合には、上記と同じ様相に加えて、もっと一つ一つをリアルにイメージをしてとらえることができる。

- ・話す自分、聞く相手（父母・兄弟・友達など）の二者を具体的に想定し、話していることばや語尾の言い回しなどにも及んで場面とことばをイメージすることになる。

其処には感情のやりとりをも含むことばの

はたらきが明確に自分の中に浮かび上がってくる。

- ・生活の中でのことばは、話し手と受け手の間で成立し、ことばが二者の心の動きと関係し、ことばによって二者のつながりが深くもなれば、逆に嫌悪感も生み出すものになってしまうことまでをイメージすることができる。

ことばから、こうしたイメージができたとき、人間相互のコミュニケーションの道具として生活そのものを左右するはたらきにまで及んでいることを捉えることになる。

- ・ことばは常に心のはたらきを通して発せられるものであり、発することばは心の状況如何によってその都度毎に違う言い方・伝わり方をする。まさに生きもののごとくの道具であることまでが浮かびあがってくるのである。

日常平易に使っていることばを、国語科という時間の中で改めて教えていくのは、何を教えることなのか、ことばの指導とはどのようにすることなのかを、このように実践的授業を通して学ばせることであると考えられる。

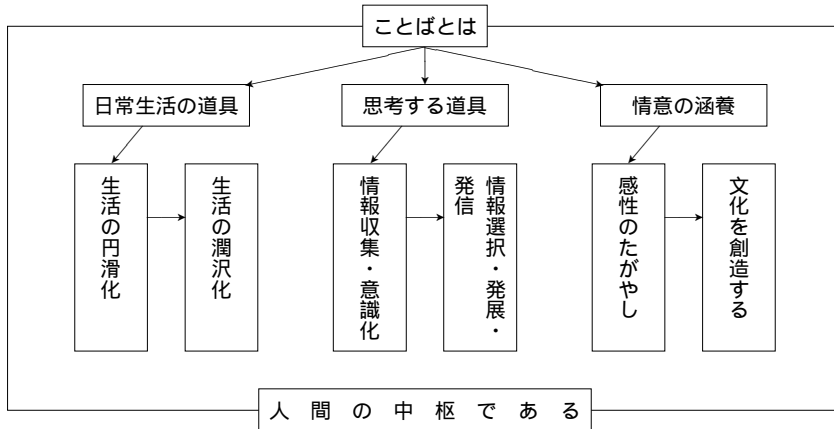
また、ことばの受け止め方の差が、個々により、大差があるのは、ことばは共通のものでありながらも、その人間固有のものであるからであり、ここにことばの学習の深さを改めて認識することになる。

前述に「国語科は自分にとって大切であることは分かっているが嫌いである。そういう教科なのである」と記した理由の一つがここにある。

個人差、その個人差が目に見えにくいものであると同時に全人格の中から出てくるものであることは、いかなる指導をもってそれに対処すればよいのか、とここでもまた課題をもつことになる。早急に解決できるものではないことを思いつつも、その解決に心を砕く

キーワードの設定に因って理解を深める

ことばのはたらきについて、理解を一層深めるため、表にまとめことばでくくって提示した。



ことが追究であり、国語科指導への関心や意欲を湧かせることになる。

ことばのはたらきを上図のように整理した。三つのはたらきがあるが、そのはたらきの度合いは、遣い手によって図の三段目のように差があることを示している。例えば、情意を涵養させるのはたらきは、感性へのはたらきかけから、詩歌・物語の創造など、ことばを遣って文化を創造することにまではたらくことを示している。分けて考えることが、分かっていくことにつないでいくとする考え方からである。

さらに、ことばと人間との関わりを総括的に捉えるために、「人間の中枢である」として括った。ことばは、人間の芯としてのはたらきをすることを、キーワードとしてここに位置付けた。重心、中核、中枢の三語から適するものを選択させ、最も確かな語として、「中枢」を選ばせた。三語を丹念に辞書で調べて、「もののかなめの役割」、「そのものの働きがなくては役に立たないすべてを支えるもの」という意を得て、ことばのはたらきは、まさしくこの語が的確であると学習者は判断した。

ここで意図的に類似の語彙を引いて比較さ

せたのは、語彙を多くもつことを意識させるためである。コミュニケーションを行うにしても、思考するにしても、その元となる語彙が少なくは、十分にことばをはたらかせていくことができない。思考するときも、表現するときも、豊かな語彙の中からの確かなことばが取り出せる力をつけることの必要性に気づかせていくことである。

平成18年2月に出された中央教育審議会の報告では、学力調査等児童生徒の実態から「国語力の育成」が強調されている。

以上は、「国語基礎」の授業に当たって、改めて、国語科指導への構えと国語力とについての自覚をもたせていく授業内容の必要性を考えての実践である。

註

- 1) 文科省による「義務教育に関する意識調査中間報告」平成17年6月実施による

参考文献

- ・岡本夏木『子どもとことば』岩波書店
- ・安彦忠彦『語彙と理論と吟味の力』光村図書